様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月１５日現在

機関番号：２８００１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０３２００３４
研究課題名（和文）　御冠船踊りの研究一対中日外交の場に生成された琉球の身体

研究課題名（英文）　A Study of Ryukuan Court Dance : On the Ryukuan Corporality formed in the Diplomatic Context with China and Japan

研究代表者
板谷　　徹（ITAYA TORU）
沖縄県立芸術大学・大学院芸術文化学研究科・教授
研究者番号：20130867

研究成果の概要（和文）：本研究は広義の御冠船踊り（大和へ帯同した芸能を含む）を近世琉球の自己表象と捉えた。江戸立（江戸上り）や薩摩上国において帯同される御座楽、唐躍、琉躍は王子使者が薩摩藩主に御膳進上する場で上演され、琉球の受容した中国文化が強調されるとともに、琉躍によって士族社会の民俗、風俗が示された。また冠船においては御冠船踊りを琉球の故事として中国に示す意図のあったことが冊封使に示される故事集の分析から判明した。

研究成果の概要（英文）：This study broadly perceives *Ukwanshin-udui* , including performing arts taken to *Yamato* , as a self presentation of pre-modern Ryukyu . On the occasion of the *Edo-nobori* or *Satsuma-jyokoku* of prince's messenger , performing arts like *Uzagaku* , *To-odori* , *Ryu-odori* etc. were taken along there in order to show those to the feudal lord of *Satsuma* during the meal served in the diplomatic ceremony called *Gozen-Shinjyo* . In those performances , Ryukyu's acceptance of the strong influences of Chinese culture was shown simultaneously with the performances of *Ryu-odori* which reflected the folk customs of upper class . Moreover , regarding the ceremony of lord-vassal diplomatic relation in Ryukyu , the intention of displaying *Ukwanshin-udui* to China as Ryukyu's mythological history by the *Kojisyu* , the panphlet for performances .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	2,200,000	660,000	2,860,000
２００９年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２０１０年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１１年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総　計	7,100,000	2,130,000	9,230,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術諸学、琉球芸能

１．研究開始当初の背景

⑴近世琉球の宮廷芸能であった御冠船踊りを芸能の様式名称と捉えれば、中国が琉球を冊封する冠船の場のみならず、1609 年の薩摩侵攻以後にその従属下に置かれた薩摩との関係、すなわち薩摩上国や江戸立を視野に入れる必要があった。つまり外交儀礼のなかで生成された芸能という理解が必要であるとともに、従来の研究視野に薩摩上国が入れられず、芸能上演の意義が解明されなかった。

⑵王府の評定所文書、尚家文書の公開によって前項に指摘した課題の解明に必要な環境が整えられといえよう。

２．研究の目的

本研究の目的は、広義の御冠船踊りによって近世琉球が従属下にあった中国、大和（薩摩）に対して自己をどのように示そうとしたのか、つまり身体レベルにおける自己表象を解明することにある。

３．研究の方法

(1)対中国については従来から参照されてきた冊封使の使録を改めて検討するとともに、尚家文書の冠船関係資料によって儀礼次第と儀礼における芸能の役割、また王府の対応を明らかにする。特に冊封使の芸能鑑賞に際して理解を助けるために王府が用意する故事集が尚家文書に含まれ、組踊りの梗概を漢文に、端踊りの琉歌を漢詩に翻訳する、その翻訳に王府の姿勢が窺われことから、故事集の解析を進める。

(2)対大和については現存の家譜資料、評定所文書により薩摩上国と江戸立の概略、特に上演の場を明らかにするとともに、大和側で記録された文献資料（『鹿児島県史料』『琉球劇文和解』など）や絵画資料（絵巻）の分析により、琉球の芸能を享受する大和の実態を究明する。

４．研究成果

(1)薩摩上国、江戸立における芸能は、いずれも王子使者が外交儀礼として薩摩藩主に対して行う御膳進上に上演されるべきものとして帯同したことが判明した。

(2) 薩摩上国、江戸立に帯同される芸能は、御座楽、唐躍、琉躍の三種であり、前二者には琉球が受容した中国文化を強調する意図が王府にあり、また琉躍（女踊り、二才踊り）は王府、士族社会に行われた日常的な芸能であり、琉躍によって琉球の民俗、風俗が示された。

(3)これを享受した大和側の絵画資料を渉猟し、比較検討することにより、1832 年の江戸立に描かれた熊本藩御用絵師杉谷行直の「琉球人坐楽之図」が記録としてもっとも正確であることが、新資料である杉谷家絵画資料（熊本県立美術館蔵）などの検討により判明した。

(4)また唐躍については、唐躍の台本及び和訳を内容とする東京大学総合図書館蔵『琉球劇文和解』によって唐躍の江戸における受容の実態の一端が明らかとなり、本資料の成立に漢語辞書『南山俗語考』を編纂させた島津重豪の関与が推定された。

(5)冠船すなわち対中国については使琉球録の解読を行い、北京の故宮博物院に 1683 年の冊封正使汪楫の使録『使琉球雑録』の未紹介の版を見出した。

(6)またこれら使録と尚家文書により、芸能が提供される諸宴の成立過程を解明し、儀礼次第を明らかにするとともに、儀礼における芸能の役割が明らかとなった。

(7)尚家文書には芸能に係る資料は少ないが、故事集によってこれまで不明であった芸能内容の総体が明らかになるとともに、故事集の名称、内容の記述から王府は神歌（おもろ）、入子躍、老人老女（長者の大主）、組踊り、端踊り、すなわち御冠船踊りを琉球の故事として中国に示す意図のあったことがわかった。

(8)以上の総括として、外交儀礼の場において御冠船踊りを考えるに際して、特に対大和については、王子使者、御膳進上というキーワードを見出したことがもっとも重要な成果であったと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（１１件）

① 板谷　徹、御冠船踊りを観る冊封使−唐の御取持、ムーサ、査読無、13、2012、１−17

② 板谷　徹、近世琉球における王子使者と御膳進上−芸能上演の場をめぐる一考察、演劇映像学、査読無、第４集、2011、141−162

③ 板谷　徹、金城　厚、細井尚子、図巻「琉球人舞楽御巻物」の芸能史的考察、沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要、査読無、３、2011、53−68

④ 細井尚子、関于琉球上演的中国戯劇、戯劇芸術、査読無、152、2009、25−30

⑤ 板谷　徹、琉球使節の芸能を描く絵師−熊本藩御用絵師杉谷行直の場合、沖縄県立芸術大学紀要、査読無、18、2010、129−146

⑥ 板谷　徹、近世琉球の対薩摩関係におけ

る芸能の役割、民族藝術、査読有、25、2009、111-118

〔学会発表〕（計１件）

① 板谷　徹、外交戦略としての御冠船踊り、2012 年３月 28 日、沖縄研究国際シンポジウム、早稲田大学

〔図書〕（計１件）

① 板谷　徹、榕樹書林、交錯する琉球と江戸の文化—唐躍台本『琉球劇文和解』影印と解題、2010、202

６．研究組織

(1)研究代表者

板谷　　徹（ITAYA TORU）

沖縄県立芸術大学・大学院芸術文化学研究科・教授

研究者番号：２０１３０８６７

(2)研究分担者

金城　　厚（KANESHIRO ATSUMI）

沖縄県立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：５０１８３２７３

細井　尚子（HOSOI NAOKO）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：４０２１９１８４

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：